笑竹桃書屋談

（三）

左千夫

凡そ人間として子といふものゝ為に、心を労せざるものは世の中に一人もあるまい、子のある人は勿論の事、子のない人と雖も子といふ問題を閑却して居るものは全からず、まして子のある人は女子と云事につき、田舎子らは田舎子らとの事につき、それ〳〵の苦労がある、余り多過きても余り少くても、其苦労のさまこそ変れ、いつれも気苦労を免れない、且つ其子に對する欲望の為には、子の多い少いに関らず、更に大の苦労を為すは人間一般の事である、乍併子のなくて淋しき苦労をするは別として、子のある人が其子の為にする苦労は、其苦労に伴ふ快楽も又多い、苦労の多いだけ系た丈快楽は何人も経験する處であらう、

人間が子を産むのは當前である、其子を養育するのは猶更當前である、子を産むと云ふことは人間の為天的権利とも言へ、又は義務とも云へる、子は即世

子で社會の共有物でない、要するに子と云問題は個人の私事で他人の干渉を持ちあすべき問題ではない、かう云つて了へば子を産むと云ことは他人の関でいわゆる問題でなくなる、さういふものであるかどうか、さう簡単

人間が子を産むのは當前である、其子を養育するのは獨乗當前である、子を産むとゐたとは人間の先天的權利とも言へれば義務とも云へる、子は即共

子で社會の共有物では無い、要するに子と云問題は個人の私事で他人の前へ持出すべき問題ではない、かう云つて了へば子をこみさとは他人の前でいひべき問題でなくなる、さういふものであるかどうか、さう簡捷に解決し置くべき問題であるかどうか、人間が其子の為に苦惱するは、當前のことゝ大抵の人は言つてゐる、勿論さういつて了つて差支ない場合が多いのであるけれども、個人的に云へば單に其人の子とのみあるが、社會的に云へば其人の子たるもの即社會の後繼者ではないか、社會は必ず其後繼者を作らねばならぬとせば、第二の社會を作るに就て、第一の社會は全体に其責任を負はねばならぬ故に、一て見ると社會は子と云問題をも個人の私事と傍看して居れば済む譯だ、

産んだ親が、どうにかするだらうと見越を就けて、社會が人の子を傍看して居るのは、甚だ横着な仕打でなからうか、勿論吾子みを養育するとして置たいは誰しもであるから、吾子に就て社會から余計な世話を焼かれては迷惑な場合があるかも知れないが、とて社會は、其の自個が理窟もあるまい。

責ふべき責任を免れるといふ

に、貧乏人は自己の為に子を養ふと云ふよりは、社會の為に子を養ふて居るのが多い、家は幸に

社會が人の子を傍看して居るのは、甚だ横着な仕打でなからうか、勿論吾子を養育するとして置たいは誰しもであるから、吾子に就て社會から余計な世

話を焼かれては迷惑な場合があるかも知れないが、とて社會は、其の自個が負ふべき責任を免れるといふ理窟もあるまい。

今の社會は種々百般の問題を研究して居るが、此の人の子と社會との關係に就て余り研究して居らぬは如何なる譯か、社會學者の説が聞いて見たい、人間の子は出来るもので作るものでない、作るものならば自分の都合のよいやうに作るべけれども、出来るものであるから、自分の都合のよいやうには多くは出来ない、之れで生活問題と關係の薄い問題と云ふことは問題にならぬが常であるが、貧子の子澤山といふ諺の如くで、貧乏人が最も多く社會の後継者を産みて居る、之れで其貧乏人が悦んで其子を養育して居るかといふに、決してさうではない、止むを得ず養育して居るので、其多い子のために貧乏に更に貧乏を重ねて居る、其子のために思ふ働きもなくて才能も没却さして貧乏して居るものも多からう、要する

に、貧乏人は自己のために子を養ふと云ふよりは、社會の為に子を養ふて居るのが多い、子は幸にして其子のために幸福を得ることもあらうが、又子の為に更に悲境に沈むものもあるから、差引五分である、貧乏人が多くの子を養ふのは、社會の後継者としての必要は大なりとも、貧乏人自身のためには殆ど利益なし、貧乏人に社會自己の後継者を養はせて、社會がそれを知らぬ顔をして自己の責任を免れて居る、どうしても横着と云はねばなるまい、國家は子を捨てるものを罰するの法律を設けてあるが、貧乏人が養ひ得る多くの子供に何等の保護の道を講じて居ない、さうして育てあげた貧乏人の子は軍用の為には三年間小使持ちの小使いにさるることがある、社會はそれを當前のこととして居る、此位横着なやり方は個人にはとてもいたされまい、社會といふものが精神的にさういふ横着なことをやつて居るから、世は文明だ社會は進歩したと云ふけれども、大多數の窮生はいよ〳〵困

難のので、其多い子のために貧乏に更に貧乏を重ねて居る、其子のために思ふ働きもせずして才能も没却さして貧乏して居るものも多からう、要する

老千夫筑竹枕書屋談原稿断片
本間文庫
文庫14
A103